

さゝ蟹

泉鏡花作

一

彫刻師廣常没してのち、三月春寒き頃、渠が生前に使ひし一切の道具賣物になりて人手に渡りたり。

渠が親しかりしといふ夥間、七八名、手を分ちて、點數を整へ、價格を定めて、適宜にこれを分配しつ。二十三日の朝よりはじめて、日の暮方に萬事を了りぬ。

家には一人の男兒ありしかど、亡き人の記念を散ずるを、坐して傍にありて見るに忍びずとて、出で、其の日は歸らず。年紀六十にあまりたる、廣常の母なる媪、一人居て留守したりき。朝な夕な打對ひたる、細工の盤の櫂なりしを、二面、疊屋が仕事しまひて、臺を擔ぎて歸るやう黄昏に肩に乘せて、少き買手の門を出去りしが最後にて、暗くなりたれば葺をおろしつ。

媪は佛壇に灯して、默然として坐してうなだれたり。

淋さびしかるべし。箆たんす、長持ながもちは無なき所しよたい帯たいの、店みせも、
奥おくも、細さい工こう場ばは固もとよりなり。鑿たがね箱ばこ、鑪やすり、鐵かなづち槌ち、二は盤ばん、
磨みがき棒ぼう、藥やげん研けんの類たぐひ、あらゆる道だう具ぐを以もて充みされたるを、
唯たゞ一日いちにちにして銀ぎんの鋼はりがね線せん、鐵てつの鑪やすりこ粉あか、銅あかの削けつり屑くずまで、
拂はたくが如ごとく賣うり拂はらひし、鞆ふいこをまで掘ほり返かへして、取とり去さりた
る土ど間まの跡あとは、大おほなる黒くろき穴あなとなりて、こゝより風かぜ
の吹ふ出きいづらむ、一いち道だうの冷れい氣き陰いん々くとして戸と障しやう子じの骨ほねに
徹てつすなり。

侘わびしきは其それのみかは。

佛ぶつ壇だん据すゑたる、六ろく疊でふの疊たゝみ、五ご疊でふの數かずは、燭ともしびの灯ほ影かげ
あざやかに照てり添そひて、蒼あを波なみかとはかりうつくしき
に、一いち疊でふのみは疊たゝ無なくて、朽くちたる床ゆか露あらはれたり。

金きん銀ぎんの細さい工こうするものゝ、鑿たがねの屑くず、鑪やすりの粉こな、自おのから
あたりに散ちりて、疊たゝみの目めに染しむぞとよ。加くふるに去い
にし年とし、廣ひろ常つね健すこなりける程ほど、第だい何なん回くわいの砌みきりなりけむ、
帝てい國こく博はく覽らん會かいの美び術じゆつ館くわんに出品しゆつするとて、地ち球きう形がたの香かう爐ろ
造つくりし時とき、朧しぶ銀ぎんの地ぢ金がねをば、彼かの鞆ふいこにて鑄いたりしに、
下した職しよく人にんの壮わか者ものの、湯ゆ床どの加か減げんをあやまりたれば、爐ろ
茶や碗わんの中なかに熱ねつし溶とけたる、五くわん貫め目めにあまれる金きん属ぞくの、
水みづに浸ひたりて、二ふたツ三みツごとゝといひしはどこそあ
りけれ、凄すわじき響ひびして、地ちを貫つらぬき、天てん井じやうを穿うがち、微みぢ

塵になりて、紛亂して、四邊は宛然暗の雪の、吹雪溜りとなれりし事あり。跡片付けて掃除するとて、彼の職人、物蔭にて、これが何の面白き、高箒脇挟んで、手を開き、足拍子踏み鳴して、密に天狗舞を躍りしが、今日の買人に交りしとか。

かゝれば細工場の疊には、多量の金目ありて、塵の中に交りつべしとて、研屋といふ、磨汁など買ひて金銀にふき分くる業するが、床も表も新らしき疊と交易せむとて、六枚の古疊を一車にして徹し去りしが、約をば果さず。収益思ひのまゝならず、引合はぬ損したりとて、かく一疊を空しくせるなり。

夜半には枕も凍りけむ、病めりし人も長きあひだ、三冬の夜をこゝに病臥しき。媪もこゝに寝まるぞかし。

題目唱へて爪繰りたる、数珠の總を頭に捻りて、媪は靜に押戴き、少しく聲をうるましぬ。

「松操院清鶴、日喬居士、むづかしいから、私はもう、たゞの名で御免被らう。廣常や、決して、悪く思はないで下さいよ、道具を賣つたとて、お金子さへ出来ればまた何うともなる。孫に働のないのぢやあない、まだあれは小兒ぢや、あゝ見えても小兒

ぢやから堪忍かんにんしてやつておくれ。そしての、好すきこの
んで出である「いん」きをするのぢやない、内うちにぢつとして居ゐ
ては心こゝろに濟すまぬのであらうから、いまにたしなむ。
私わたしも樂らくになりませう、憂慮きじううておくれでないよ。「
と小ちひさきからだを伸のびあがりて、回向帳えかうぢやうをばさしの
ぞきぬ。

「暗いことねえ、」

お京は空を打仰ぎ、片手を後ざまに、帯の結目丁とさして、小包一個小脇にしながら、足早にぞ來懸りたる。小路の中央を、前途より、衝と來て行逢ひたる男あり。左に避くれば、左に塞り、右に交せば、右を遮り、附絡うて二たび三たび、路を横に切りていであひつ。

「あば、よ、」

と大なる口あけて、故とらしく笑ひたり。見向きもせず、其まゝ片除けて通過ぎむとする時、また身を以て立蔽ひて、

「今晚は、」

屹と見しが、宵闇の空曇りて、ものゝ色定かならず、唯灰色の姿のみ、裾より下の闇より黒きに、たゞ、素足の白きが仄なり。

「はい、こんばんは。」

ものともせず、落着き澄してお京は答へ、袂を觸れつゝ、ツと抜けて、薄齒の吾妻下駄、臆せず高く響かしながら、悠々と行き過ぐる。

やり過して物蔭より、二人ばかり立顯れ、さきの男
と一團になりぬ。

「凄いな。」

「凄いや、凄いとも。ありやお前、京屋といつて、
それ御存じでもあらうが、名代の絲屋の細君よ。う
んさ、舊は娘よ。え、誰だつて舊は娘だ？ 何を詰
らないことを云つてやあがる。凡そ此の國を二ツに
仕切つて、山から手前にや、アノ位な娘は無からう
と云つたもんだ。」

養子をしてから、もう、さうだ、八年にはならう。
此間小さいのが一人病院で亡くなつたが、彼で七歳に
なる兒があるんだ。二人の子持だが、何うだい、何
うだ、二人の子持だが何うだつたら、よ。」

「何うしたと。」

「やい、これ、何うしたと云ふやつがあるか。あ
れでな、二人の子持だが、何うだ。やい、口惜くば
何とかいへ。」

「嫌だ、此の野郎、物騒だぜ。」

「物騒だといや、ほんたうよ、己かう見えてもな、
一寸からかつてでも見たいと思つて二三年もこれ苦
勞をしたと思へ。いつでも、あの生若いなりをして、

小面の憎い、小児を連れなきや戶外へとつては出ないぢやないか。其癖、女中一人連れようぢやないが、何うもな、其處は人情だ、くらがり峠を夜中に一人歩いてゝも、小児を連れてると思や、氣の毒で、それ、手もつけられまい。後月まで、まだ、見得も外聞もなしに、二番めのを引背負ひの、トやつて、十文字にかけてたもんだが、幸といふやつもないが、末の兒は亡くなつた。上の方はもう七ツにもなつて居りや、これ、偶には留守をさせるわ。そこぞ、あゝ身輕に、一人あるきの、ふいと出て來た奴よ。處で、此方もふいと出の、ぐいと占、とやらかさうと思つて、まづお前に瀬ぶみをさしたんだが、いや、恐しく腰が据つてる。何しろ、近所で評判の我まゝもので、いよ、別嬪、などゝやると、奥から飛んで出て、御苦勞様、と來ようといふ、頗侠のお轉婆で、手に合つたものぢやないが、三人よつて、指を銜へるでもあるまいさ。一ツぶツつかつて、おどしてやらうか。

「何うせ威す方かな、」

「頼もしがられようといふ柄ぢやねえ。」

「其の氣で附合へ。」

「そら、横町からまはつて出る。」
ひそ／＼と語り合ひて、角なる板塀の黒きに消えたり。

「不景氣な獺だよ。」

お京は呟きて顧みつ。夜の辻を唯一人、上着の片裾引きあげつゝ、暗き道を辿りたる、裏道を左に切つて、横町へ出合がしら、左右より男の聲して、

「姉さん、何時だね。」

「をばさん。」

と門口より念にばた／＼と走り入りし、お京は土間に衝と立てば、上框寂莫として、物のある氣勢もせず、見透す障子の破れたる裡に、佛壇の灯幽なり。

打額き、引返して、再び門に走り出で、敷居越に戸外を窺ひ、

「さあ、来て御覽。時計を見ないかよ、若衆さん、

若衆さん、おい。」

早や人の影もあらず、見さだめて、はたと鎖し、

「時代な奴だよ、詰らない。」

と投ぐるが如くいひ棄てつ。やがて内に入りて四邊を見ながら、つか／＼と上りしが、透間より奥をすかして、此時までも餘念なく、人の來れりとも心着かで、耳疎き媪の看經したる、淋しき姿をうかゞふより、あどけなき笑を洩して、極めて靜に障子をあげ、身を捻り、拔足に、踵を浮して衝と寄りつ。

油をや、さゝむとする、片膝立てし背後より、ものをもいはず優しき手して、丁と其の肩をたゞきたり。

珠數を膝に振返れば、身軽く片足あとに退きて、白き手拭の疊みたるを、口にあてゝぞ聲を呑みたる。

「お京かい。」

「はい。」

「おゝ、吃驚した、悪い女だなう。」

莞爾して、坐りもやらず、

「ほゝゝゝ、伯母さん、不用心よ。」

「お前が、また意地の悪い、わざと拔足で來なされるからぢや。」

「あら、耳が遠い癖に、おほゝゝゝ。眞個はね、門の戸の方は立派に音をさしてがらりと開けたの、遠慮をしないでつか／＼と入りました。ね、兼ちやんはお留守のやうで、伯母さん一人のやうだから、それから、あの、だもんだから、つい。」

とまた花やかに笑うて坐し、手拭持てる手を横ざまに疊につきて、媪の顔を瞻りたり。

淋しき老も笑み傾け、

「お前幾つだ、いつも其だから先のお婆さんが心配をさツしやつた。子持ではないか、ほんたうに、お前、幾歳になると思はつしやる。」

「出ましたね、またおはじめだよ、私が七歳の時

も、お前幾歳になる、十歳になつてもお前は幾歳、十五になつてもお前は幾歳になる、二十になつてもお前は幾歳、いつりでも幾歳になる、幾歳になるツて聞かれたわ。伯母さんも姉妹だから、おんなじやうなことばかり言つてらつしやるよ。あんまり口惜いから、いつでもお光に然ういつてやりますわ。光！

お前、幾歳におなりだツて、おはゝゝゝ。」
佛の前を片寄りつゝ、

「お光は何といふ？」

お京は、中指に搦みたる、手拭を放して棄て、少しく顔を傾けながら、左右の手の指を數へて見せ、

「ね、恚うですツて。」

目を上げて差のぞき、

「何だの、其は、二ツと、三ツと、えゝ、二と三、

二十三 や、そりや、お前の年紀ぢやあない

か。」

「あい。」

お京は故とらしくうつむきたり。

「あてこともない。幾歳ぢやと思ふ、おゝ、またいうた。はや、お光が七つといふに、お前、もうちつと大人しくならぬかい。このあひだ、お此が亡く

なつてから、また一層若返つたやうで、困るなう。」

「だつてもね、伯母さん、年増になると、お婿様に嫌はれます。」

「そんな事があるものか。」

「あら、眞個だわ。」

「しかし、まあ五十年も昔の氣で、兎角言つたとて始まるまいが。可い、可い、若い内が何も花ぢや。世の中はをかしいで可いことさ。お前は氣散じで結構ぢやの。」

「はい、伯母さん、くさ／＼したツてはじまりません。」

と、正面に燈を顔にうけし、色白く、唇紅く、黒眼勝にうるほうたる、眦凜として切上り、眉一文字に引しまりて、生際に疵の痕、稚き時の過失ならむが、見るからに稍險なり。

引詰め結びたる銀杏返し、油氣もなくて亂れしまゝに、奴元結固くしめて、根懸もかけず、

簪も挿さず。此の廣常が刻めりといふ、花橘の黄金細工の、針ばかりなる鬘留のみ、眞中にさしたるが、今しも血の色、頬にのぼりて、雪なす顔に色を染めし、お京のいつも激する時は、殊に人目に立つ

とぞいふなる、額の疵きずの、思おもひなしか、後毛おくれげにふれ
て動うごくと見えし、急きんにまた和やはぎたる、目めの中うち優やさしく、
唇くちびるうるほひ、

「あの兼かねさんは。」と向むき直なりぬ。

四

「兼は朝つから何處かへ出て行つたが、もう歸りさうなものぢやと思ふけれども、何か、友達の處へでも寄つたのかの。」

「暢氣なことねえ、折角來てやつたものを、居ないぢやあ、私、詰らない。」

「餅でも焼かうの。」

「澤山よ。」

手を掉りて拂ふ眞似する、お京は物足らぬ顔色なり。

「老人を對手ぢやあ詰るまい、もうお歸りかい。」

お京は活潑に瞳を動かし、

「あら、そんなこといふなら歸りやしないわ。はい、まだ／＼居ます、うむとお邪魔をして参ります。」

媪は背屈みながら手てに掌てを翳し、お京の顔を見て微笑みたり。

「兒を持つても未だ意地が留まないの。ほんたうに、もうちつと、氣を緩くして、穩當にならつしいよ。」

この姉さんは、他に點の打處はないけれど、氣短なばかり、お前、それでは兒が可哀相ぢや。む、

髪はのひました、立派に長うなつた。もう／＼あんなことは二度とするぢやあない、何處にまた氣がくさ／＼したとつて、婦人が髪を切つて、**ニ**り出すといふのがあります。此のうつくしい姉さんが、あの時はまるで方なしだつた。ほんたうに氣を着けさつしやい。悪いことはいはぬから。」

「はい／＼、御無理、御道理、畏りましてございます、ほ／＼、兼さんも知つて／＼？」

「あゝ、知つてるとも。彼もお前、親身のことぢや、お前さんのこつちや心配をして居るわの。」

お京は此の時差俯向き、姿も聲も優しいなりぬ。

「極が悪いねえ。」

「何の、兼にやあ何でもない、婿様に私はまた、

愛想を盡かされるやうなことが、あつてはならぬと

思ふから、

「ふ、」と仰いだる顔の動くに、後毛揺ぎて額の

疵、またあり／＼と顯れつゝ、

「お婿様、お婿様ツて嫌だわ、私、お珍しいものゝ

やうに、をばさん羨しきや譲つてあげるわ。」

媪は聞くと、苦笑して、

「勿體ない。そんな氣でつきあつて居ると、お前、

浮氣になります。」

「え。」

「婿様がよ。茶屋、小屋遊びでもはじめたら、何うおしだ。」

「何ういたしまして、些少夜遊びでもするやうだと可いけれど、朝から晩まで、ちやんとござつて、お金子の番よ。」

「結構なことではないかい。」

お京はしをれぬ。

「だつてさ、少しだつて私の自由になるのぢやなし。驛逵局の通帳につけてあつたつて、後にも前にも、たつた一人のをばさんにお小遣もあげられないやうぢや、效がありません。ねえ、をばさん、内の人にや、ヤレ伯父だ、それ伯母だ、従兄弟だ、兄弟だ、嫁取だ、婿取だ、役についた、歸省した、及第した、會社へ出る、子が出来たつて、も年中お祝に行くやら、来るやら、あのまた里の次郎どんと来た日にや、水浸の丸太が芽をふいたやうな、毛だらけな太い足を恚うやつて」

お京は引かけ結びの帯を垂れて、腰を落とし、眞白き素足の甲をならべて、割膝に坐つて見せ、前齒に

手拭てぬぐひを引銜ひっくはへ、ぐいと片手かたてに引張りひっぱながら、

「こんな工合くあひに内うちへ来きちやあ坐すわつてますわ。朝來あさきて、晝ひるから來きて、晩ばんに來きて、泊とまつて歸かへると、またおいでだ。根氣こんきの可いいッたらありやしない。里さとから小舅こじの入り込こむのは、まあ私わたしん處ところばツかりよ。」

といふ聲こゑ激げしく、脚くはへたるまゝ手拭てぬぐひを、ハラリと廣ひろげて顔かほを蔽おほひ、膝頭ひざがしらに手てを組くみて、お京きやうは天井てんじやうを仰あふぎつゝ、二ツ三ツ身震みぶるしたる、棟むねの逆木さかぎの夜氣やきにあたりて、ギ、ギ、ギ、と鳴なる音おとに、はツとせし状さまにて居住居あすまひを直なほしぬ。

お京はつく／＼四邊を見つ。抜去り、取出して、箱の類、盤の類、賣りたるあとの魂はいふも更なり、穴だらけなる室の内の、彼處此處に隈をなして、唯てら／＼と置きたる、佛壇のなかのみぞ、冷たき光に輝きたる、疊の數も不足せり。

「私が方のたつた一軒の親類といや、これだも

の。」

とお京は溜息、

「をばさん、まだ疊を入れちやあくれませんか。」

「おゝ、其には困るけれども、いくら催促をしても埒埒あかぬ、酷い奴よ。何時のことだと思はつしやる、彼是ともう、五月も経たうではないか。汝が好で疊をおこして、無體に持つて行つた癖に、収益が少いからというて、此方へ迷惑を掛けるのぢや。」

とやゝ繰言も交りたる、お京は再び「しつゝ、ほろりとせしが然りげなう、打消して口輕に、

「可いわね、こんなことは息子の役よ。ちつと兼さんを酷めておあげなさい。然うすると困つて言出してお話しだらう。金子を、といふ聲が懸りや、そ

りや、ちよいとは出すまいけれど、私が内のにぶつかつて、言分をつけようのに。意地が悪いのか、我慢なのか、所帯じみた話といつちや、うそにも私に聞かせないから、此方から口を出して、間夫ぢやあなし、ねえ、をばさん、張合がなくツて、内のこと言分も出来まいぢやありませんか、憎らしい、兼さんだわ。ねえ、

と甘ゆるやう、口説くが如く胸の内を、割つて見せたる言ぶりなり。媪は聞いて悦ばざりき。

「それが我まゝといふものぢや。そんなまた無理なことをいうて、じれるものが何處にあらう。兼も男ぢや、何んなに切なくたツて父様が亡くなり早々、お前の家へ無心がましいことをいふものか。私もの、兼にちつとはほツといふ呼吸をつかせて遣りたいから、あり體にいへば、時折は、フィとそんな氣が出ぬぢや無い。えゝ、出ぬぢやあないどころか、いひたいが山々ぢや。けれども、然うしては、そこは血を分けたものでない悲しさに、なう、また婿に僻みでも出てはお前がためになるまいと思ふから、十度辛抱をして居るのに、まあ、お前は何うしたものでや。」

「あれ、をばさん、そんなに坐り直して何ですよ。膝に手を置いてちやんとしてるんぢやありません。横になつてうむ／＼と呻いて在らつしや／＼いよ。」
と眞顔にいふ、媪は呆れて、

「何故ぢや。」

「でもさ、今夜はをばさんが御病氣の分だわ、ちよいと、もしお見舞にやつて遣はさりまし。うむ行てこい、ね、好ござんすか、ほ／＼ほ／＼、」

「まあ。」

「堪忍なさいよ、だつて遊びに來たいんだもの。」
居寄りて膝に手を置きぬ。ぢつと見て、肩に掛けし、老が腕に力籠りて、

「お京や。」

「はい、七歳になります。」

「何、誰も年紀を聞きはせぬよ。」

「でもまた幾歳になるが出さうになつたからさ。」

「お光は可愛からう。」

無言なり。

「の。」

「いゝえ。」

とばかり打背きぬ。媪は憂はしげに瞻りしが、とい

きをつき、

「お京や、些少話すことがある、まあお聞き。」
あらたまらむとするを見て、お京は笑ひに紛らした
り。

「御病人が起きて在らつしやつては毒よ、さあお
寝れ。横になつて話しませうね。何うもかうやつて
るとお話が畏つて、いけません。私が床を取つてあ
げませう。お床を取つてさしあげます。お禮をおつ
しやい。よう、ちよいと、お嫁様兼帯だわ。」

「お泊りかい。」

「お泊りさ。」

「やれ／＼。」

「其代あしたちゃんと早起をして、お飯を焚いて
さ、お味噌をすつてさ、一日樂をさしてあげますか
ら、可ござんすか、後生！ をばさん、御病氣の分
にして、」

「あゝ、罰のあたる。」

お京は起つて甲斐々々しく、夜具戸棚より二組の衾
をば取出し、南枕にならべて取りぬ。

「さあ／＼これがをばさんの床ね、心得たもんで
せう、此方のは兼さんの。」

といひかけて立迷ひし、媼おつなに枕まくらさせてのち、繻子しゆすの帯解おびときかけて、する／＼手繰たぐり出しながら、不圖ふとものを思おもふ状さまにて、坐すわりもやらず、立ちも果はたさず、しを／＼とする見みえたれば、

「こゝへ、さ。」

と夜具やぐを衝つとかゝげ、媼おつなはおのが衾ふすまを分わかつを、ぢつと見みて猶豫ためらひぬ。

「まだ、お歸かへりでないね。アノ野良のらさん、マ何時いっまで夜遊よあそびをしてるんだらう、一ツ驚おどろかしてやらうや、ね、をばさん、吃驚びつくりさして、いゝ氣味きみだ。よ、」

とばかり、二ツ襲かさねを脱ぬいで棄すて、長襦袢ながじゆばん一ツになるより、脱兎だつとの如ごとく夜具やぐの中に、投げ込なむ状さまに身みを埋うづめ、

「おゝ、冷つめたい、」

と身を震ふるはし、茶枕ちやまくらに惜氣をしげもなく、浮ういたる鬢びんすらをおしあてながら、媼おつなの方に寝返ねがへりして、

「嫌いやだ、もう夜具やぐの中なかが堅かたくツて石いしの様やうよ。働はたらきのない、色いろの一ツぐらゐ拵こしらへりや可いいのに、ね、一ひとツ暖あつためて、あやからしてやらうか。」

とつゝましげなく言いひ聞きえ、物語ものがたりして時經ときへたり。ソと片手かたてをば衾ふすまの袖そでの、冷つめたきなかに推おし入いれつゝ、玉たま

なす胸むねに引着ひきつけて、
砕くだくるばかり握にぎり緊しめ、うつと
りとして目めを眠ねむり、襟えりに額ひたいをあてたる美人びじんの、何等なんら
の夢ゆめを見みむとかする。

六

媪おつなは佛壇ぶつだんの扉開とびらあけたるまゝ、
油足あぶらたし油足あぶらたし、
燈明とうみせう

ひとも
に灯して、明方まで滅さず置き、三寶の掛物、祖師
の像、過去帳を瞻りながら、枕着くるが習慣なりき。
お京が何をか夢みむとて、孫が衾に眠りたるにぞ、
ものがたりとた
物語途絶えたれば、背後向きて、佛壇の方に目を注
ぎぬ。

老いたる人の寝ね難きに、一向に見入りつゝ、傍
目をもふらざりける。戸外には往來留みぬ。遠きあ
たりに犬の吠ゆる、枕に響くばかりなり。鼠の桁を
走る音や、急に、やゝありて、またゆるやかに枕に
響く。

瞬きもせで見詰めたる、燈明暗くなりて、一幅あ
まりの黒き影、祖師の背後に映るとぞ覺えし、其の
まゝハタと横ざまに、流るゝ如く、迂り落ちて、青
疊の上に影を敷きたるなかより、走るものあり、小
さき蟹、大なる蜘蛛の形したるが、むく／＼と動き
はじめて、湧くが如くに蠢ぎ出でつ。

右に這ひ、左に這ひたる、其の姿定かならず、朦
朧として、譬へば描きたるものゝ、紙とゝもに、風
に吹かれて靡くに似て、燈影一幅明き間を、疊の上
に、浮いつ沈みつしたりしが、見る／＼、少しづつ
影を離れて、青き上に、白き光澤ある新しき疊の表

に、ツト其の形を顯せしは、鼠色したる蟹なりけり。
風に落葉が其の位置を、奇しくも轉じ行くかの如
く、枕頭を颯と抜けて、サラ／＼といふ音聞え、足
の動くが、皆見えたり。

時に風吹かず、梢も鳴らず、水の流るゝ聲だも聞
えず。内も外も寂としたるに、一たひ井戸車の音し
て留みぬ。

さゝ蟹はひたと走れり。走りて土間に下りたる、
大なる蜘蛛とこそ見えたりけれ。

二筋細き燈心の、幽けき光の照らさざる、土間の
あたりを、なほ走り行ゆ氣勢して、やがて黒くなり
て、方一尺あまり、土窪みたる鞆のあととなる、穴の
底に、淀める白に蒼味を帯びたる、曇れる月の色と
なりて、其のさゝ蟹の姿露れ、底の方に沈み／＼、
次第々々に小さくなりて、あはや消え失すると見え
たるが、忽然と浮び上り、穴を出づると忽ち見え
サラ／＼といふ氣勢のみ、土間の暗きを行きたりし
が、はやくも再び座敷にのぼりつ。

媼が寝たる枕頭を、おんなじ状にて駈けめぐれり。
これを誰が棄て置くべき。媼は半身衾を出で、膝
行さまに手をのべつ。指のさきを少し離れて、追は

るゝまゝに馳せたりしが、八々と床柱に衝當りぬ。

棟木また、ギ、ギ、ギと沈み、三更の夜半、肌寒

きに、御佛の

灯恰も暗く、陰々たる室の内に、さゝ蟹の影薄きが、いま床柱に觸れたるにてか、音するばかり左右の足、兩方に離れて落ちて、ばら／＼になつて散りぬ。

「阿三」と叫べる、媼は余にきよとりと坐りて、咄嗟のさき目に見えし、蟹は隻影だもあらざりき。

「はてなあ。」

媼は色をかへぬ。

顧みれば、お京は寝たり。すや／＼と眠りたる、唇も、鼻も、目も、眉も、額もかくれ、髪のみ枕に亂れたるに、白きものありて、輝いたる、花橘の香なるべし、一脈の沈香ふすまを籠めて、恚るさみしき伏屋のなかに、馥郁として掬すべく、忘るゝばかり薫りにけり。

七

「長さん、ちよいと長さん、此方へおいで。お幸もおいで、霜、お前も来ておくれ、早くしないのか。」

京屋の奥なる金筆笥の前に座を占めて、お京の慥く聲高なるに、お幸とて七歳になりたる其女と、長といへる職人と、霜と呼べる下婢と、皆來れり。

「む、皆揃つたね。」

障子の合せめに背を凭たして、お京が眞似て見せて、媪をして鬻ましめたる、式の如き下司なる状して、天井を仰ぎたるは、婿の弟なり。鼻低く、眼の細きが、空嘯きて仰向けり。此奴、鬢まだらの口角にして、見事に唇の厚ければ、墓にぞ似たりける。

小舅の顔を流晒にかけ、

「次郎さん、お前さんも聞いて下さい。私やね、盗賊をするからね。」

たゞ顔見たり。座にあるものは皆動揺みぬ。

「兼さんたア私や再従見妹さ。だから親類、可いかい、親類とは交情をよくするものさね、次郎さん、だから、お前さんともなかよしだね。」

お京は冷かに見て微笑みたり。次郎は頤を搔撫づる。

「だからまた、兼さんともなかよしです。なかぞ可いつたつて、何も不思議なことがないぢやあないか、ねえ、お前。」

下婢等は目を見合し居るのみ、お京は悠々と落着き澄して、

「なかぞ好いのに、なかをよくするのに、別に何ぢやあないか、私にさ、兒があつたつて構ふもんですか、人の女房だつて構ふものか。」

瞳を据ゑて、ぞつと見て、

「すると、其のなかよしの兼さんに、九死一生といふ困ることが出来たんだ、皆知つて居よう、ほら、此人。」

お京は鬚留を抜いて取れり。

「これはね。なかよしに貰つたの。そして兼さんの父様が打つたのだわ。お前たちにや、いつて聞かしたつて分るまい、次郎さんは分るんですか。」

お京は恍惚せる風情にて橋の花に口をあてぬ。

「何をツて、此花さ。名人が拵へたのだから、生きてるんです。飛ぶんぢやありません、花だから動

きやあしないけれど、夜中になつて人が寢靜まると、
芬々薫るの、橘の香だツてね。私ン家でお婿様と寢
て居ちや、人間並だから何にもならない。兼さん家
で泊つてさ、お祖師様の燈明が陰氣になつて、座敷
が薄暗くなつて森とすると、良い薫がしたよ。媪さ
んばかりぢやあなくツて、私もさう思つて慄然とし
たもの。お、勿體ない。私等が頭にのつけとくも
んぢやあない。お姫様にでもさしあげると可いんだ
わ。だからお前たちにやあ分ちないといふのさ。次
郎さん、分りましたか。」

渠は澁面してもの言はざりき。お京は頂いて髪に
挿み、

「其の癖こんなものは、をぢさんがチヨイと鑿を
使つたばかりだつて。何と、其の手で、一生懸命に、
七々日の間精進をして、身體を清めて、清正公様を
念じて、そしてお造ンなすつた蟹があるの。これは
かりの小さなもんだよ、可いかね。」

「（足が氣に入らない、見てもしやちこばツて、
少し歩行くと折れつちまふ、不具になる、危険だ、
人に渡して恥を曝さないやうに壊して仕舞はう、鐵
槌を持つて来い。）

とお亡なくなさる少ちつと前まいに然さういつたんださうだけ
れど、もう手てが利きかないで、それツきりになつて
のが、兼かねさん家とこの佛壇ぶつだんに秘かくしてあるの。

(半はん作事さくじでも可いい、渡わたしてくれ、金かねも澤山たくさんやつて
ある。)と、お客きやくからは催さい促そくするしさ、をばさんだ
つて、兼かねさんだつて、親おやではあり、兒このことなり、
そんなに言いつて在いらつしやつたのを、何どうして人ひとに
やられるモンかね。次じ郎ろさん、こりや分わかりましたか。
ね、人情にんじやうツてもものは、達たつ者しやで居ゐるうちは商賣敵しやうばいがたきで、
あゝだの、かうだの、いつたのが、亡なくなると一時いつとき
に誉ほめ出だして、わツといふ評判ひやうはんだから、品物しなものに價ねが
出でて來きて、大騒おほさわぎをやつてるので、無む理りやりにも取とら
うとする。

渡わたされないぢや、ありませんか。

では金かね子を返かへせといふのさ、むかうから然さう出で
筈はずなの、こりや當前あたりまへ、長煩ながわづらひで稼かせぐ人ひとが寝ねて居ゐたの
で、目星めぼしいものは皆みんななくなすし、積つもつたつて知しれて
るわ。

昨夜ゆうべも金かねが出來できないツて、水みづも呑のまないで駈かけま
はつて、なかよしの兼かねさんが、狂氣きちがひのやうになつて、
お濠ほりへ飛とび込んだ夢ゆめさへ見みました。

たツた二十圓。

日によりや内で一日の賣高よ、貸して下さいッて、
こんなに、譯をいつて、私や

お京は聲をふるはしたり。

「生れてから、はじめて人に頭をさげて頼んだの
に。内の人は肯いてくれないで、知つてる通り、ア
ノ喧嘩さ。親類一同と相談をして、良人の頼邊を打
つた仕置をして貰はうツて、出懸けたんだから、い
まにアノ會杜のも、曹長も、兀天窓も、繼母も、鬼
婆も、女郎屋の亭主をして居るのも、皆でやつて來
て、私や、眞中に取ツちめられて、口惜泣きに、泣
死をしつちまふんだね。ね、私の親族といつたら、
をばさんと、兼さんばかり、あんな弱蟲だもの、何
うして力になるものかね、眞個のことですが、次郎
さん。」

此時額の疵動きて、凄まじき目の色なりき。

「もツと兼さんに力がありや、今までお前さんが
無事で居よう筈もなし、また兼さんが生きて居よう
筈もないんですからね。あの兒も年紀がゆかないで、
澤山お前さんにやあ口惜い思をさせられたわ。

何うせ、お仕置をされるんだ。平手で張くじいた

位いゝぢや、大勢おほせいが寄よつてたかるのに、手てこたへがある
まいから、何どうだね、長ちやうさん、お霜しも、私わたしが最もう一ひとツ
罪つみを造つくつてやるといふな。」

自若じじやくとして、

「見みておいで、次郎じろさん、長ちやうさん、お霜しも、よく見
ておいでよ。お京きやうが皆みんなの前まいで盗賊どろぼうをします。きつち
り二十圓ふたじゅうえん、この筆筒たんすからね、亭主ていしゆの金かねを盗ぬすむんだ。」
ソレといふ、手てに剃刀かみそりを引ひツそばめて、逆さかに取とつ
て片膝かたひざ立て、寄よらばとばかり身構みがまへへたり。

【完】